

椋山女学園大学大学院教育学研究科 修士(教育学) 学位論文要旨

Summary of Master's Thesis: The Degree of Master of Education, Graduate School of Education,
Sugiyama Jogakuen University

保育施設における事故とその予防に関する研究

——名古屋市立 A 幼稚園での参与観察と聞き取り調査を中心に——

野田 舞 (教修第001号, 学籍番号: C14DA001)

はじめに

保育施設は、子ども達が健やかに成長することが期待される場であり、大きな怪我をしたり、命が危険にさらされたりすることがあってはならない。しかしながら実際には、こうした事故が絶えることはない。園庭や遊具に関わる事故については、現代の日本では、維持管理のための予算や、事故が発生した時の保障に莫大な経費がかかることから、「危なそうなものは撤去」という発想で対処されることが多い。子ども達のチャレンジ精神や楽しみを損なうことなく、安全・安心が確保される方法はないのだろうか。少しでも事故や怪我を防げる方法について提案していきたい。

研究の方法

本研究で用いる方法は、国際比較とフィールドワーク、インタビュー調査である。日本とオーストラリアの安全基準を比較する国際比較研究を行い、基準面において日本に足りないところを指摘した。また、平成26年4月から平成27年2月の約1年間、名古屋市立 A 幼稚園でインターンシップ生としてお世話になりながら、そこでフィールドワークを行い、実際の子どもの姿や先生方の動きを観察することにより、安全な環境維持において配慮すべき点を明らかにした。そして最後に、平成27年9月から11月にかけてベテラン保育者5名と新人保育者10名にインタビュー調査を行い、保育者は、事故を発生させないために、どのような配慮を行ってヒヤリハットを管理しているのか、またベテラン保育者の事故防止の観点は、新人とはどのように異なるのかを分析した。

結 論

第一章では、日本とオーストラリアの安全基準を比較した。オーストラリアには、すべての保育に関わる人々が、手軽に手に取ることができ、保育者が本当に知りたいこと、知っておくべきことが分かりやすい表現で書かれている網羅的で一覧性のある安全基準があることが分かった。一方、日本においては、さまざまな安全基準が存在し、それらはとても詳細な記述となっている。安全基準一つひとつをしっかりと読みこなすと、日常の保育に役立つ情報がたくさん盛り込まれていることがわかるが、安

全基準の種類が多く、どのような安全基準があるのかの全体像を把握するのが難しいため、それらを探す手間や時間がかかってしまうのが現状である。必要な時にすぐ参考にするのできるオーストラリアに類する基準を作成することが、非常に有益であろう。ただし、いくらマニュアルを整備しても、その量が膨大であれば、読まねず、結果としてリスクの低減にはつながらない。また、保育者養成や現職教育の場面などで、保育者がマニュアルを学ぶ場を確保していく必要もあると論じた。

第二章では、事例研究として名古屋市立A幼稚園の安全基準とメンテナンスについて調査した。名古屋市独自の基準やメンテナンス規定はなく、A幼稚園で定めたチェックリスト「安全点検票」をもとに、月初めに保育者全員で安全点検を行っている。保育者は、チェックリストの項目に該当する箇所において、①子どもが怪我しない程度のものであるか、②子どもが安全に使用できるようになっているのか、などを確認のうえ、チェックリストに現状を書き込んでいく。また、「メンテナンス計画書」は存在せず、職員たちの判断によって取り決めている。安全点検で発見した異常個所を園長先生と主任の先生に見てもらい、今後の補修についての見通しについて決めてもらう。保育者や業務士たちで直せるものなら直し、職員の力だけでは改善不可能な場合には、業者の人にできる限り早めに対処してもらっているが、他の園との兼ね合いや、お金の関係もあるため早期対応が不可能な場合もある。

第三章では、リスクとハザードの管理の重要性を明らかにした。国土交通省の指針では、子どもが危険性を予期して遊ぶ楽しみとしている「リスク」と、子どもが予期できない危険性として取り除くべき「ハザード」を区別する重要性が指摘されている。ハザードの把握は、園庭や子どもの遊びの様子を観察し、日頃からきちんと遊具の状態や子どもの行動について理解していることが大切となる。そして、ハザードを減少させるためには、落下対策を行うこと、子どもが安全に使える状態となっているのか日頃からの点検を怠らないこと、子どもへの遊びの指導の工夫等が必要となってくる。一方、リスクの把握については、子どもがリスクを感じるようになるためには、さまざまな危険性を経験してみる必要もあり、子どもの遊びを制限しすぎることは子どもの危機管理能力を育むことを阻害することにもなる。リスクが生まれる可能性について予測し、大怪我に繋がりうる遊び方については、見かけたらすぐに子どもに問いかけたり、子どもに気づかせたりする指導が必要である。

第四章では、ベテラン保育士と初任者に対して行ったインタビューデータを分析した。保育経験年数による事故防止のための重要な観点の違いを3つ見出すことができた。第一に、保育に関する現場の情報量が大きく違うことである。ベテラン保育者は、子どもの動きや、事故が起きやすい遊具を把握していて、見通しをもってパターン化した対応をすることができている。第二に、安全面に対する意識の違いである。安全点検を行う際には、どのようなところに配慮して点検を行っていけば、以前発生したような事故へと繋がらないなどの着眼点がもてることから、新人保育者より気をつけてみるべき個所に多く気づいている。第三に、子どもへの配慮すべき点と保育者

の関わり方である。子どもの事故やヒヤリハットを経験した数が多い保育者ほど、子どもの危険な行動に対していち早く制止の声かけをし、遊びを制限してしまいがちであるが、一方で、保育経験年数が高い保育者は、この程度なら見守っていればよいが、これ以上するとやめさせなければ危険であるという見極めができるため、必要以上の子どもの遊びの制止や、遊びの中断をさせることがない。子どものチャレンジ精神と安全の確保を両立させる配慮の観点を新人保育士も身につけていく必要がある。

おわりに

本研究を通して、子どものチャレンジ精神を育むために、ワクワクドキドキが備わった遊具を守っていくこと、その遊具を残していくためには遊具の安全管理と事故防止を行い、それらを両立させていくことが大切となってくることが分かった。今後は、実際に保育の現場に入ったときに、修士論文で得ることのできたこれらの情報を自分の保育に活かすとともに、保育施設における安全性と危険性とどのように関わっていくのかを私自身の専門性にできるように研究を続けていきたい。また、日本の安全基準をより良いものにし、事故を減少させていくために、誰が見ても分かるような保育施設の安全管理と事故防止についてのハンドブック作成に携わっていくことを、今後のライフワークにしていきたい。

指導教員：山田真紀 教授

主査：宮川充司 教授

副査：山田真紀 教授

副査：石橋尚子 教授